

新生児-乳児消化管アレルギー-全国Web登録症例の臨床情報検討

研究協力者 鈴木 啓子 国立成育医療研究センター 免疫アレルギー研究部

研究要旨

新生児-乳児消化管アレルギーは、近年急激に患者数が増えているが、その病態についてはまだ不明な点が多く、臨床的特徴を明らかにする目的で患者の医療情報登録システムをWeb上に構築し全国から患者情報を募った。新生児-乳児消化管アレルギーAサイトに登録頂いた症例のうち、Miceli Sopoの診断基準を満たす1歳未満発症362症例について、クラスター分類に基づき、検討を行った。その結果、クラスターごとの臨床的特徴が明らかとなった。特に、海外でほとんど報告のない、クラスター1については、重症合併症を合併する症例が多く、早期の診断治療の重要性が明らかとなった。

A. 研究目的

新生児-乳児消化管アレルギーは、近年急激に患者数が増加しているが、IgE依存性食物アレルギーの1/100程度の発症率であるため、その病態には不明な点が多い。臨床的特徴を明らかにする目的で患者の医療情報登録システムをWeb上に構築し全国から患者情報を募った。

さらに、欧米において確立された疾患概念と、日本の患者の臨床的特徴が異なる点があるため、日本の患者の詳細な臨床的特徴を明らかにし、疾患概念構築を目指した。

B. 研究方法

新生児-乳児消化管アレルギーAサイトに登録頂いた718症例のうち、Miceli Sopoの診断基準を満たす1歳未満発症362症例について、クラスター分類（嘔吐、血便の有無により4グループに分類；J Allergy Clin Immunol 2011）に基づき、臨床像・検査結果・食物負荷試験の結果・治療・合併症等について検討を行った。

C. 研究結果

発症日令は、クラスター1（嘔吐+、血便+）は有意に早かった（中央値 CL2 12.5日，CL3 34日，CL4 29日に対してCL1 7日）。イレウス、消化管穿孔などの重症合併症は、6.1%に見られ、クラスター1に多かった。各種検査においては、クラスター3では血中好酸球数は低く（中央値 CL1 12%，CL2 13%，CL4 12%に対してCL3 7.75%）、CRPは高値であった（中央値 CL1 0.46mg/dl，CL2 0.98mg/dl，CL4 0.11mg/dlに対してCL3 3.79mg/dl）。milk-specific IgEはクラスター4では他と比較して、陽性率が低かった（CL1 24.2%，CL2 29.4%，CL3 19.6%に対してCL4 5.0

%）。ALSTでは、クラスター1とクラスター2において陽性率が高かった（CL3 41.2%，CL4 57.1%に対してCL1 74.6%，CL2 77.3%）。病理所見ではクラスター4での好酸球の増多の陽性率が高かった（CL1 71.4%，CL2 77.8%，CL3 66.7%に対してCL4 93.3%）。また、早期寛解例がクラスター1に多いことが判明した。治療では、アミノ酸乳による治療が高度加水分解乳・母乳に比して症状再燃率が低かった（症状再燃率はアミノ酸乳 13.9%、加水分解乳 28.2%、母乳 24.4%）。

D. 考察

クラスターごとの臨床的特徴が明らかとなった。特に、海外でほとんど報告のない、クラスター1については、重症合併症を合併する症例が多く、早期の診断治療の重要性が明らかとなった。

診断治療指針公開後開始した患者登録であり、早期の適切な治療的診断が行えているためか、これまでの報告と比較し合併症が少ない印象であった。

また、不足データもまだ多く、主治医と連絡を取り、今後より詳細な情報収集が必要であると考えられた。現在、好酸球性消化管疾患および新生児-乳児消化管アレルギーオンラインシートBサイトを稼働しており、今後新たな情報を分析することでさらなる病態の解明に努めていく予定である。

E. 結論

今回の検討で、各クラスターごとの臨床的特徴を明らかにすることができた。これからの新生児-乳児消化管アレルギーの診断・治療の確立に貢献することができたと考えられた。